

さりげないスナップ写真のすてきな笑顔のように
群馬の教育や文化の話題をふだん着のままで紹介するシリーズ



青年期を考えるー今日の授業は、本音で意見表明

6月20日、梅雨入りしたとは言え良く晴れた午後、群馬県立高崎工業高等学校におじゃましました。今回は、高崎健康福祉大学の学生5名と深見匡先生も、「教職指導」の授業の一環として参加しました。

高崎工業高等学校（高崎市江木町：宮内光一校長：生徒数837）は、昭和14年に創立された伝統ある工業高校で、地元はもちろん全国の実業界で多くの卒業生が活躍しています。学校運営の方針には、生徒たちに「豊かな教養と工業に関する基礎的な知識・技術を身につけ、産業界の発展に寄与できる実践力を備えた人間性豊かな工業技術者の育成を目指す。」と明記されています。

全日制は、機械科（2学級）、電気科、情報技術科、建築科、土木科、工業化学科の7学級。定時制は4学年、機械電気科、建築科の2学級（平成29年度からは、工業技術科の1学級〔年次進行〕）。県下最大規模の施設・設備に加え、先端技術の習得にも対応できる充実した設備を誇っています。また全国的にも珍しい給食を実施しており、食欲旺盛な高校生に好評です。

現代社会「青年と自己実現～大人に向けて～」

出迎えて下さった田中立仁^{たつひと}先生は颯爽として若々しい雰囲気、まさに脂の乗り切った40代です。今日の授業は建築科3年生、担任クラスです。39名の生徒（男子26名、女子13名）はすでに着席して私

たちを待っていました。この日は、私たちだけでなく、校長先生、教頭先生をはじめ、幾人かの先生方が参観にみえていました。

教室は3階にあり、サッカーの授業中の校庭の向こうに高崎の街並みが広がります。

青年期とは

授業は6時間目の現代社会。今日は単元「青年と自己実現～大人に向けて～」の第一時間目です。田中先生は、まず青年期とはどういう時期なのかをハヴィガースト※の分類によって説明していきました。

幼年期 (0～5歳)、
児童期 (6～12歳)、
青年期 (13歳～17歳)

※ロバート・J・ハヴィガースト(1900年 - 1991年)は、アメリカの教育学者。

そこで田中先生が「みんなの中で18歳になった人、手を挙げて」と質問。7～8名ほどの生徒が手を上げました。「18歳選挙権になったから、主権者になったんだよね。もう一人前、大人の仲間入りしたんだ。」

ハヴィガーストによれば、18歳からは壮年期(18歳～30歳)、そして中年期(31歳～55歳)、老年期(56歳以上)と続

きます。う～ん、取材陣の倉林も瀧口も確実に老年期なのですねえ。そろそろ老年期の新しい分類が必要な時代になってきました。

田中先生は、青年期の特徴を生徒と問答しながら板書していきます。「身体的には? ムムム(この部分は、やんちゃな生徒が多いクラスでは大変盛り上がり脱線するそうな。今日は、参観者が多いこともあり静かな反応です。)」「第二次性徴」という答えが生徒から出てきました。青年期の精神的な特徴は大事です。「子どもと大人のあいだ…不安定な時期。苦悩することも多いよねえ。レヴィン※はこの時期の人間を『マージナルマン(境界人)』と言ったんだ」の説明にうなずいている生徒もいます。

※クルト・レヴィン(1890- 1947年)は、心理学者。ドイツのモギルノ生まれでユダヤ系。1933年にアメリカに亡命。社会心理学の父と呼ばれる。

グループで考えてみよう①「こんな大人になりたくない」

ここで先生は「では、これからグループになって話し合ってもらいます」と指示、生徒は慣れた様子で4人一組に机を寄せ合いました。3人グループが一組だけできました。



「まず①の問題＝こんな大人になりたくない。ふだん大人に対して思っていること、本音で言ってね。何言ってもいいよ、

表現の自由は保障するから。」

生徒の話し合いが始まりました。意外に静かなトーンでしたが、だんだんと話が盛り上がり、笑い声が起るグループも出てきました。先生は、時々グループ間を回っていきます。

グループ代表による発表

5分たったところで、「発言者を一人決めて下さい。これから発表してもらいます。」

さあ、生徒からどんな意見が出てきたのでしょうか。全てを列举してみます。

・ニート(「ニートってどんなの?」と先生「働かない、閉じこもり…」「そうだね、これはまた後でふれるから)」

・いばる人 ・すぐとなる

- 常識を知らない
- 酒癖が悪い
- 生き甲斐がない
- 人の話を聴かない
- 挨拶しない、礼儀がない
- 自分の考えをおしつける
- 自己中
- 無責任
- 怒れない
- マナー守れない
- タバコすう（「タバコやめてよよかったよ」と田中先生）
- 口だけ
- 人によって態度を変える（「そうだね、上下関係を見て、比べてね」）
- 応用がきかない
- 無駄な話が多い
- 理不尽
- 自分を信じられない
- へりくつばかり言う
- 傲慢（ここで、先生「ゴウマン、うーん、
- ギャンブル
- 暴力
- 不潔
- 上から目線
- バカにする
- 時間を守らない
- 謝れない
- 気配りができない
- お金が一番
- 暴言
- 自己主張
- ケチ、欲深い
- うそつき
- 浪費ぐせ
- うーん、

どう書くんだっけ。漢字忘れたよ。誰か書ける人？電子辞書持ってる人」と生徒に助けてもらう場面も）

- 冗談が通じない、正論ばかり言う
- 権力を押し付ける
- 失敗や間違いを馬鹿にする

まあ、出てきた出てきた。きっとこれらの発言の裏には具体的な体験や人物があるのでしょうか。日頃言えないで溜めている疑問や批判…、大人への厳しい視線が痛いですねえ。なんだか自分のことを言われてるみたいなの、そういえば、どこかの政治家もそんな人がいるような…。田中先生は、生徒の発言を丁寧に聴き取り、相づちを打ったりフォローしたり、聞き込んだりしていききました。

先生の指導案には、「指導・支援の工夫」として、「反面教師の大人も多く、大人不信の生徒もいる。生徒の意見を率直に出させ、しっかり受け止めながら共感する」と書かれています。

グループで考えてみよう②「こんな大人になりたい」

次の問題は②どういう大人になりたいか。

各グループから出てきた意見を列挙します。

- 人をほめる
- 仕事を任される＝信頼、信用
- 間違いを認める
- 自分の意見をもっている（他人に流されない）
- 自分以外の人を愛せる
- 物を大事にする
- 人の気持ちがわかる
- 成長し続ける
- 注意できる
- 人の話を聴ける
- 思考させてくれる
- リーダーシップ
- 人を信じれる
- 常識
- 排除しない
- 気配り
- 我慢できる
- 衛生面
- 心が広い
- 他人のために
- 笑顔
- お金
- やさしい



- かっこいい
- 田中先生みたいな人
- 規則正しい生活
- 思考できる
- その場で片づけられる
- おもしろい
- 言い訳しない
- 挨拶できる
- マナー
- 礼儀正しい
- 家事できる
- 子ども思い

さきほどの問題に比べると控えめな感じがします。

参観者にもインタビュー

出尽くしたところで田中先生「今日はお客さんが来ているから、お客さんに聞いてみましょう。どんな大人になりたかったですか。どんな大人になってほしいですか」と我々にインタビュー。不意をつかれながらも、参観者がそれぞれに答えてくれて、ちょっとした交流の場になりました。

この授業は全体が「青年期と自己実現」の導入です。まるまる一時間、自由な意見交換と発表の場を保障して、「大人として必要な要件を考える手がかりにしたい」と田中先生は位置づけています。次の授業は「青

年期の内面的変化と発達課題」「社会の変化と青年」と進み、大人に向けて「アイデンティティの確立と自己実現」の課題に向き合うこととなります。挨拶をして、充実した1時間が終了しました。



◆ 授業後の懇談会で田中先生に聞きました ◆

授業終了後、高崎健康福祉大学深見匡先生と5人の学生、それに瀧口、倉林の取材陣と田中先生による懇談の場が設けられいくつかの質問に答えていただきました。

なりたい・なりたくない・の順番は？

いきなり理想を語るのは難しい。「どんな意見を言ってもよい！と伝えてもなかなか言えないものです。しかしなりたくない大人は？と聞くとけっこう出てくるのです。教師の個人名を出して不満を語ることもあります。

「傲慢」は本当にわからなかったのか？

本当にわからなかった。あそこでごまかしたくはない。教師もわからないことがあるという姿を示すことは互いの信頼につながると思います。

今後の展開は？

本日の授業は「意見表明」が目的で、今後、今日の話題を発展させることはありません。続きは青年期の話になり、社会が求

める大人の条件はなにか、経済的自立、問題解決能力などが求められるという話になります。

今のクラスがあるのは？

高工の生徒はみなよい生徒で教師としては幸せですが、ここまで来るには生徒同士の人間関係でいろいろ苦しむこともありました。逃げずに来たので今のクラスがあります。生徒と教師が互いに努力して積み上げてきたものです。今は進路に向けて考える時期ですが、生徒と教師の信頼関係がなければ乗り切ることはできません。教師が信頼されるためには、連絡や授業がしっかりしていないといけません。生徒も教師も互いに頼り合えることが大切です。頼られることは信頼されていることの証です。

信頼されるためには？

仕事をする事。話を聞くこと。話しかけること。初めて会った時に私はあなたに危害を与えないことを示す。生徒は関係性のない人の話は聞かないですよ。

◆授業は教師の命…田中立仁先生からのメッセージ◆

「授業は教師の命」、初任の時に先輩から聞いた言葉。今でも胸に刻んでいます。授業で意識していることは当然ながら「生徒の学び」です。興味をもって楽しそうに学んでいるか。きちんと知識を身につけて理解しているか。自分なりに思考して意見を表明したり、他者の意見を聞いて深めたりすることが出来ているかなどです。単元によって様々な授業形態があり、今回のような形ばかりではありませんが、生徒の実態をよく把握して、一方的にならぬよう心掛けています。また、その単元のねらいは何かということ、安心して意見表明できる雰囲気づくりも心掛けています。

授業のポイントは素材と工夫

授業参観では観てほしいポイントがあります。目立つ話術が注目されやすく、感想でも多くなりがちです。勿論、言葉がメインの仕事ですから話術も大切でしょうが、一番大切なところはそこではありません。授業を「料理」に例えるとわかりやすいと思います。美味しい料理は何が違うのでしょうか。それは①素材、②下ごしらえ（準備）、③調理の仕方でしょう。なかでも、調理技術より、よい素材を見つけられるか。目利きが重要です。授業で言えば、話術や授業展開よりも、どんな教材を用意できるかということです。同じ教科書を使用しても教材の工夫で授業は大きく変化します。センスや技術を磨くことも大切ですが、教材研究に時間を費やし、地道に工夫と努力を重ねることを肝に銘じています。（実際は業務の多さに、なかなか厳しいですが…）

また、生徒の様子を特によく観てほしいのです。授業参観をして退屈そうな生徒の様子を見ることも正直多いはず。楽しそうに学習している授業は何が違うのか。教師

に注目するだけでなく、一人ひとりの生徒をよく見ることで気づくことがあります。教科や授業内容に関係なく、共通するものがあるからです。



みんな信頼関係を築く努力を

今回、担任のクラスで授業をしました。3年間クラス替えがなく気心も知れています。クラスの雰囲気がよいと周囲から言われることが多く、よき生徒に出会えたと感じています。ただ、良いことばかりではなく、様々なことを味わってきました。生徒同士、衝突したり、支え合ったりしながら時間をかけて、みんなでよい関係を築くよう努めてきました。少しずつ信頼関係を紡いできたのです。この先もまだまだ山あり谷ありでしょう。（笑）

教師でよかった

授業後の懇談会で、数々の感想をいただき、有難く思っています。「幸せそうですね」と言われたことが一番印象に残りました。教育現場の多忙さ、教育行政からの押しつけや理不尽さなど多くの問題としんどさもありますが、目の前の生徒と過ごす毎日に私自身が幸せを感じているからです。教師生活 26 年目にして、教育の難しさを痛感しながらも、この仕事について本当によかったと思っています。

◆ 大学生の目から見た田中先生の授業 ◆

高崎健康福祉大学健康福祉学部の5人の学生は、教育実習を終えたばかりで、ある意味、目が肥えています。彼らに感想を聞いてみました。

◆「とても面白い授業でした。時間を気にせずグループで出した意見を全て言うことで何度も出した意見を強調して生徒達の共感を引き出していると感じました。また、板書の際にすぐ出てこなかった難しい漢字を平仮名や片仮名で誤魔化すのではなく、素直に生徒に聞くことができるのはすごい。生徒たちに聞くことで生徒たちの反応を引き出していたのはすごいと思いました。」(新井 哲)

◆「生徒とのコミュニケーションをととても大事にしている、アクティブラーニングを取り入れているなどと思いました。担任しているクラスだからかわかりませんが、生徒との間に強い信頼関係を築いていて、生徒のことをよく見ている人だなと感じました。」(今井彩乃)

◆「実習後ということで、見るべきポイントがわかっていることで、田中先生の凄さ

がはっきりとわかった。受容と共感の姿勢で生徒の意見を無にしない、(発問が) <なりたくない大人>から<なりたくない大人>の順序で不満の方が言いやすいなど、生徒をやる気にさせる技術からも言えるが、なにより、それを支える生徒との良い関係がとてもよく現れた授業で、私自身、田中先生のような教師になりたいと強く感じました。」(大嶋隆篤)

◆「導入として、生徒自身に自分の立場と併せて考えさせることによって、授業の内容に入り込ませることで授業に集中させていたので大変素晴らしい。授業内で意見発表の場を作り否定せず受けとめていて、自由に意見が発表できる場を作れるのもすごい。教師が上から大人の理想像を伝えるのではなく、生徒自身に考えさせるのが良いと思いました。」(橋本 望)

◆「身近な問題をグループワークのテーマにしている、考えやすい。生徒の発言に対して一つ一つ考察を述べている。発表する時、話し合う時のメリハリをつけている。」(山口菜摘)

<取材を終えて>

学生が「もっと早くに、教育実習前に連れて行ってもらえればよかったのに」と残念がっていたのが、印象的でした。

先生からのメッセージに、授業づくりと生徒との関係づくりの核心が述べられています。先生は教材研究のために、文献や研究会はもちろん海外を訪れたり各種フィールドワークへの参加等、その熱意は並々ならぬものがあります。

先生が黒板の隅によく書いておく「思考」は生徒に身に着けてほしい「学力」です。その土俵になるのが、「自由な意見表明」の場としての教室と授業、ライブ感覚で紹介



しましたが、いかがでしょうか。

私達にとっても念願の田中先生の授業取材。なにより素敵で励みになったのは、学校現場の厳しい現実の中で、生徒と過ごす毎日に幸せを感じている先生の姿でした。

お忙しい中、取材を承諾下さりご協力をいただいた校長先生をはじめ、教職員の方々に感謝申し上げます。

《取材・撮影・編集：倉林順一・瀧口典子》